

# 私のおすすめ スペシャル 2023

「私のおすすめ」は、図書館の資料を取り上げて紹介する、『ぱるらんど』でおなじみのコーナーです。通常このコーナーの書き手は本学学生や卒業生の図書館スタッフですが、今号はスペシャル版として、図書館委員の先生方におすすめ資料を紹介していただきました。

大学図書館には図書館委員会という組織があり、各専修から先生方にご参加いただき、図書館の運営に日々お力添えをいただいています。

今回は2023年度に就任された7名の先生方からのおすすめです！

## ヘルマン・ヘッセの世界へ

青木 高志

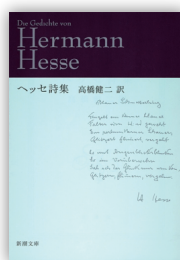
ドイツ文学を代表する文豪、ヘルマン・ヘッセ(1877-1962)の「白い雲」という詩をご存知だろうか。初めてこの詩に出会ったのは音楽大学での授業だった(国立音大ではないのだが)。高橋先生とおっしゃる先生の、その年のテーマのひとつが「詩」で、授業中に配られたプリントにこの詩はあった。青空にさすらい漂う白い雲に、人生の悲しみと喜びを重ね合わせ、まるで音楽のように紡ぎ出される言葉の連なりに驚き、また微かな物悲しさを携えたヘッセの世界観に感激したのをよく覚えている。

思い返せば小学校の頃から詩は好きで、読み漁るとは到底言えないが、時折読んでいた。詩の持つ得も言われぬ余韻に惹かれたのかもしれない。

ヘッセは「ひたすら詩人になりたい」と願った作家だったというが、まさにそういった心からのほとぼしりが、こうした美しい世界を紡いだのだろう。その発されるものが言葉であれば詩人や小説家、音であれば音楽家などの表現者であるのだとしたら、どんな水準であれ、その心からの欲求や表現はとても尊いものに思えるの

である。好き嫌いはあっても構わないので、音楽はもちろん、詩や小説、絵画など…「美しい」と思える世界に沢山出会い、心からの表現を紡いでいくことが出来たなら、きっと人生に大きな潤いをもたらしてくれるのではないかなと思う。

当時購入した新潮文庫『ヘッセ詩集』は、透明フィルムカバーを施して持ち歩くほどの愛読書となって今も手元にあるが、手に取るとあの頃のわくわくした気持ちを思い出させてくれるのである。ちなみに高橋先生とは今でも年賀状のやり取りをさせて頂いている。



『ヘッセ詩集』  
ヘッセ(著)；高橋健二訳  
新潮社 2014  
請求番号●J126-908

●あおき たかし 本学教授(ヴァイオリン)

## 古くて新しい！リトミック指導書

伊藤 仁美

国立音大生の皆さんならリトミック、という言葉聞いたことがありますね。授業を履修している方も多いかと思います。リトミックはスイスの作曲家・音楽教育家のエミール・ジャック＝ダルクローズ(1865-1950)が創案しました。音楽と動きを融合させて、音楽感覚や心身の調和を育む音楽教育方法です。現在、日本の音楽教育現場にはリトミックが広く普及しています。その先導者として小林宗作(1893-1963)と板野平(1928-2009)が挙げられます。小林はヨーロッパに2度リトミック留学し、帰国後日本リトミック協会を創立しました。1950(昭和25)年、小林は国立音楽大学附属幼稚園初代園長に就任しました。板野は広島市立中学校教諭を経て、ニューヨークにリトミック留学をし、帰国後1956(昭和31)年より本学講師に就任しました。小林と板野は本学におけるリトミック教育研究機関の設置に携わり、またダルクローズの著書を沢山翻訳し日本に紹介しました。1960(昭和35)年、両名が共著で出版したのが『子供のためのリトミック』です。

本書は、戦後はじめての本格的なリトミック指導書です。序の部分には「ダルクローズが創案したリトミックを子供の音楽指導のために分かりやすく、しかも即座に授業に応用できるよう配慮して書いた」と記されています。拍子、アクセント、リズム・パターン等の様々な音楽要素を、身体運動を通して経験する活動が多数掲載され現代の教育現場でも十分に行うことのできる、まさに“温故知新”の優れたリトミック指導書です。



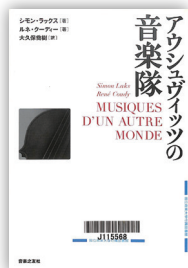
『子供のためのリトミック』  
小林宗作、板野平著  
国立音楽大学出版部 1960  
請求番号●C1-509

●いとう さとみ 本学准教授(幼児教育)

## 異国の歴史に思うこと

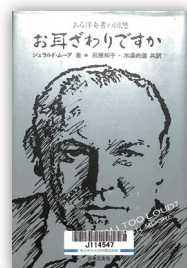
加納 悦子

アウシュヴィッツ強制収容所から生還した二人のユダヤ系フランス人が書いたドキュメンタリーです。収容所での恐怖生活の中で音楽が果たした役割、それは収容者だけでなく、ナチス側のドイツ人たちにとっても何だったのか、一私たちが今日、ベートーヴェンやヴァーグナーを愛しているのと、それは同じレベルだったのか、多くの解けない深淵なテーマを孕んでいます。



『アウシュヴィッツの音楽隊』  
シモン・ラックス、ルネ・クーデー著；久保喬樹訳  
音楽之友社，2009  
請求番号●J115-568

イギリス生まれのピアニスト、ジェラルド・ムーア(1899-1987)は20世紀の多くの著名な声楽家の「伴奏者」として活躍しました。当時まだ歌曲伴奏の地位は低く、歌手のリサイタルに伴奏者の名前が書かれないこともありましたが、ムーアは自分の仕事への誇りを持ち、そんな音楽界に一石を投じ続けてきたといえます。著書中には様々な歌手が実名で登場し、中には辛口なコメントもあって、



楽しみながら読んでいくうちに「歌の伴奏の神髄」を学べる良書です。

『お耳ざわりですか：ある伴奏者の回想』  
ジェラルド・ムーア著；萩原和子、本沢尚道共訳  
音楽之友社 1982  
請求番号●J114-547

●かのう えつこ 本学教授(声楽)

## 静寂の奥にある音楽、そして人間の根源

河原 忠之

コロナウイルスの影響は、世間一般において絶大であったが、個人としても多くの価値観をひっくり返す事となったのは私1人ではないと思う。家に籠った時、私は何故だかわからないが、バッハだけを弾いていた。理由は、言葉にできない。ただただ家のピアノでバッハだけを弾き続けた。そして、それだけでなくステージでも、ある種の宗教的体験と言えるような体験をした。心の中にある映像がはっきりと心の中に見えたのである。その瞬間、ただ嗚咽するのを抑える事に必死だった私を見て、共演者の方は微笑んでくれた。そして、いくつかの偶然から、ある寺の副住職と出会い、その方とご縁で仏教に入信した。それほど、その舞台での出来事は私にとって衝撃的であり、そうなったのも、コロナ禍での家籠りがあったからこそなのである。

そんな中読んだ、アンドラーシュ・シフ(1953-)の『静寂から音楽が生まれる』は当時の私の心境にピタッとくる事ばかり書いてあった本で、音楽の意味、そして文字では表現できない事がいかに大事かが書かれている。是非、今の利便性追求社会に慣れている学生の皆さんに読んでいただきたい。



『静寂から音楽が生まれる』  
アンドラーシュ・シフ著；岡田安樹浩訳  
春秋社 2019.9  
請求番号●J135-783[ほか]

●かわはら ただゆき 本学教授(ピアノ)

## 芸術は飾りではない(パブロ・ピカソ)

末松 淑美

スペインの小都市ゲルニカがナチス・ドイツの無差別爆撃によってことごとく破壊されたというニュースに衝撃を受けた画家パブロ・ピカソは、凄まじい集中力で巨大な絵画《ゲルニカ》を描き上げた。「芸術は飾りではない。敵に立ち向かうための武器なのだ」というピカソのことばで、原田マハのアート小説『暗幕のゲルニカ』は始まる。

物語は2つの異なる時間で構成されている。1つは1937年、ピカソがパリで《ゲルニカ》を描いた時代。もう1つは2001年9月11日、ニューヨークの世界貿易センタービルが同時多発テロで破壊された日から続く現代。この2つの時間が交互に描かれ、2つのストーリーはやがて1つにつながっていく。

主人公は、ニューヨーク近代美術館MoMAのキュレーターで、ピカソ研究者の日本人女性である。結婚したばかりの最愛の夫を9月11日のテロで失う。アメリカはすぐに報復の空爆を開始。主人公は、夫のためにもピカソ展を成功させたい、戦争してはいけない

ことを世界に伝えたい、そしてそのためにはマドリードにある《ゲルニカ》をニューヨークで展示したいと奔走する。ピカソが《ゲルニカ》に込めた思い、暗幕の謎、史実とフィクションが混ざり合う緊迫のストーリーである。

世界から戦争のなくなる日は来るのか。来てほしい。東京丸の内で原寸大の《ゲルニカ》陶板製レプリカに会える。この本を読んでから見に行ってはどうか。ピカソの声が聞こえてくるかもしれない。さて、私たちはピカソに何を話そうか。



『暗幕のゲルニカ』  
原田マハ著  
新潮社 2018.7  
請求番号●文庫||新潮||は-63-2  
(資料ID:L010392)

●すえまつ よしみ 本学教授(ドイツ語)

## 騙されたと思って読んでほしい本

中田 朱美

世の中には、あらずじすら触れてはいけない話が存在する、と私は思う。私にとってその筆頭は、チェコが誇る、20世紀前半を生き文豪カレル・チャペック(1890-1938)の「マクロプロス事件」である。学生だった頃、新訳として出たばかりのこの本を読んで受けた衝撃は大きく、今も私の中で大のお気に入りの文学作品であり続けている。著者曰く、もともと小説として構想していたものを戯曲(演劇用台本)としてまとめたのだそう。チャペックの発想力。ペシミズムとオプティミズムをめぐる示唆に富んだ御託!そしてこれらを異曲同工のように見せてしまう風刺の効いた才知。そのいずれもが、今も眩しくて仕方がない。当時はインターネットで「ネタバレ」という言葉を見かけるようになるずっと前のことだったけれど、その「決定的仕掛け」を秘めなくてはならない本であることはすぐに直観した。なので、ここでもどんな本なのか、皆さんに紹介することはできない。こんな具合なので、あとがきはもちろん、帯や序言に書かれていることも、何をしてくれるんだという想いに駆られるほど。これまで「何かお薦めの本を教えてください」と質問してき

てくれた学生さんに、何回この本をお伝えしてきたことだろう。そしてその後、読んでくれた学生さんが笑顔で感想を話してくれる様子を、何度「そうでしょう」としたり顔で聞いてきたことだろう。

ちなみに、本作をもとに創られたヤナーチェクの同名オペラはもちろん、ベルクのオペラ《ルル》も、ポーの象徴主義の体感型小説『アッシャー家の崩壊』も、ぜんぶネタバレ禁止です。



『チャペック戯曲全集』より  
「マクロプロス事件」  
カレル・チャペック, ヨゼフ・チャペック(著);  
田才益夫訳  
八月舎 2006  
請求番号●J109-940

●なかた あけみ 本学准教授(音楽学)

## 初心にかえる

渡辺 俊哉

今回、学生の皆さんに向けて「私のおすすめ」という内容で原稿を書いてくださいと依頼されました。しかし絞るのがなかなか難しい。あれこれ考えてみた結果、今回おすすめするのは、映像資料の『The Last Message』です。

毎年夏に札幌で開催される、PMF音楽祭\*を知っている人も多いと思いますが、この音楽祭は、指揮者、作曲家、ピアニスト、教育家としてその才能を遺憾なく発揮した、レナード・バーンスタイン(1918-1990)が提唱して始まりました。音楽祭には様々な国から選抜された若手演奏家が集結し、彼らを世界のトップ・プレーヤーが教育するというもので、この映像はその第1回の記録です。バーンスタインは亡くなる年に来日して、若手メンバーで結成されたPMFオーケストラを指導したのですが、そのときの様子が主に収録されています。なぜこれをおすすめするのかというと、作曲に進むか迷っていた高校生のときこの放送を見て大いに刺激を受け、覚悟を決めたからです。映像の中でバーンスタインが、音楽の

奥深さや、音楽に真剣に向き合うことの大切さを全身全霊で若い演奏家に伝えていたことを、今でも、そのときの気持ちと共にはっきり思い出すことができます。それだけ私にとって強烈な印象だったのです。したがって音楽を専門的に学んでいる皆さんにも、是非様々な刺激を受けて欲しいと思いました。

ところで、井手副学長はこのオーケストラに参加していたそうです! 映像に若かりしときのお姿が映っているかもしれません。副学



Britannica ImageQuest

長を探すという違う楽しみもあるかもしれませんね(笑)。

\*パシフィック・ミュージック・フェスティバル札幌

『The last message = 最後のメッセージ』  
バーンスタイン  
ニホンモニター・ドリームライフ事業部 (発売・販売) 2006  
請求番号●VE1905

●わたなべ としや 本学准教授(作曲・音楽理論)

ご紹介いただいた資料は、図書館カウンター前の企画棚で展示する予定です。  
先生方が感銘を受けた本、学生の皆さまにおすすめしたい本をぜひ手に取ってご覧ください!  
図書は冬休み貸出もできます。